

#### 4. 実践活動を規定する教師の経験の意識化

ここで取り上げるワークエレメント「自己経験」は、「自己知覚と他者知覚の繊細化」に貢献するエレメントとして考えられている。すなわち、自由意志で授業改善を志向しているスーパーバイザーとしての教師が、自分の実践活動を規定している自己経験を意識化することによって自己知覚を繊細にし、その成果にもとづいて授業改善に向かうという道筋が考えられているのである。教師の実践活動を規定している要因として、当該教師が習得している諸理論と諸経験が挙げられるがしかし、諸経験は無意識のうちに実践に影響していることが多く、教師に必ずしも明確に意識されているわけではないので、その意識化のワークが意味をもつと考えられる。

ここでは、自己経験が教育スーパービジョンに果たす役割を明らかにしたうえで、教師が自己経験を意識化することが、授業改善にどのように役立つかを明らかにする。そのためにまず、自己経験の理論的考察に基づいて、授業改善に向けて教師が自己経験を意識化することの意義を考察し、キールモデルにおけるワーク「自己経験」の位置づけを示し、自己経験の意識化の方法ならびに教育スーパービジョンワークの進行を検討する。

##### 1) キールモデルにおけるワークエレメント「自己経験」の位置づけ

ここで取り上げるワークエレメント「自己経験」は、第2の自己知覚と他者知覚を繊細にするためのワークエレメントに含まれる。スーパーバイザーとしての教師が、自分の職業活動を反省し、その改善に取り組むためには、何よりも意識的に「自分自身とコンタクト」をもち、自分の活動について繊細になることが求められる。キールモデルは、日常的な授業実践から出発している点に特徴をもっているので、授業観察(自己観察と他者観察)から出発している。そして授業や教育活動を規定しているスーパーバイザーの教育コンセプトがワークの対象となる。観察や観察データをもとにした対話、あるいは教育コンセプトについての対話には常に、スーパーバイザーとスーパーバイザーの自己経験が何らかの形で反映される。スーパーバイザーは専門家として自己経験の意識化がトレーニングされているが、スーパーバイザーにとっては、自己経験が意識化されている場合もあれば、そうでない場合もある。その意味で、この自己経験は、授業観察あるいは教育的自己コンセプトの熟慮など、スーパービジョンワークのどのレベルにおいても問題となるエレメントである。その点において、授業観察や教育的自己コンセプトの熟慮のためのワークとは異なった位置価値を持っているといえる。

したがって、自己経験に関するスーパービジョンワークは、それ自体として取り上げるのではなく、授業改善に向けたテーマに関するスーパービジョンワークの進行にとって必要だと判断された限りにおいて、取り上げられるという性格をもつ。そして、どのようなテーマにおいても必要だと考えられれば取り上げられるという性格をもつ。

ワーク「実践活動を規定する教師の経験の意識化」にとって、キーワードは「自己経験」

である。概念「自己経験」について、パラシュ（W.Pallasch）は、「非常に多くの困難を準備している」概念であることを指摘し、心理学における「自己経験」概念の検討を通して、概念「自己経験」は一つの理論的構成物であることを指摘している<sup>1)</sup>。そして「自己経験」を一言で言えば、「私についての経験」であり、それは、「人間が社会的アイデンティティを確立する」一つの運動であることを指摘している<sup>2)</sup>。すなわち、人間が小さいときから経験したことが、意識的、無意識的に蓄えられ、その人固有のかたちでネット化され、その人の現在の状態を作り出すというのである。だから「自己経験」は、そのようなある人物の現在の状態を表現しようとする理論的構成物なのである。そしてまた、「私についての経験」は、私自身に意識されているとは限らないし、また私自身だけでそれを意識化できるものでもない。自己経験は、「他者の言説をとおして媒介される自分自身についての学習」<sup>3)</sup> である。

このように「私についての経験」である「自己経験」は、その人のアイデンティティ形成の進行過程を示しているがゆえに、常に意識的、無意識的に当該人物の行動に影響している。そして、この経験の特徴は、何よりも常に情動的色彩を帯びていることである。すなわち、社会的な事件や出来事を経験した私についての経験であり、常に情動を伴っているゆえに、リアルな出来事や事件などを「客観的に」再構成するのをむつかしくする。

例えば、宿題をしてこなかった生徒に教師は注意をする。そのとき、この注意は、宿題をしてこなかったという生徒の行為自体にむけられたものなのか、それとも宿題を出した教師の権威が害されたことに対する注意なのか。教師はそこで、自分が生徒に真面目に受け入れられず、教師の自己価値感情が損なわれたと感じたのか。このときの「私の経験」は、教師自身によってどのように再構成されるのか。このように、「自己経験」は、その時々々の情動を伴うがゆえに、自分で客観的に再構成することを難しくする。しかし、この経験が、当該生徒とのその後の関係における教師の行為に何らかの影響を与えることはありうることだろう。

教師がこのように自己経験を蓄積しているのと同様に、生徒もまた自己経験を蓄積している。授業を生徒と一緒に構成するということは、教師にとっては未知の自己経験を持つ生徒と関係することであり、教師が自分の活動に影響している自己経験について自覚的であればあるほど、生徒の活動をより「客観的に」見ることが出来る。教師が、自分の活動に、自覚されていないいわば隠れた影響を与えている自己経験について意識的であるとすれば、あるいはその影響についてできるだけ意識的に説明できるとすれば、職業活動において自己経験をコントロールすることは、より容易になるだろう。自己経験をコントロールすることによって、生徒の活動に影響している生徒の自己経験を「客観的に」見ることができるようになっていくだろう。

この関係について、パラシュは次のように述べている。「他者を批判的反省に向けて教育したい人は、まず自分自身が問われる準備性がなければならず、その人は自分自身でこの熟慮の過程がどのように経過し、それが何を自分に引き起こし、作用するかを試してみ、体験しなければならない。だから経験関連的学習が問われ、要求される」<sup>4)</sup>。生徒を理解し、生徒に批判的反省能力を育てようとする立場にある教師は、だから自ら自己経験を反省する機会をもち、自己経験を熟慮する過程を体験する必要があるというのである。

ワーク「実践活動を規定する教師の経験の意識化」は、教師が自己経験を意識化するのを援助し、教師が、職業的文脈において自己経験をコントロールできるようになることを支援するものである。その意味で、心理学の「自己経験グループ」とは異なっている。少なくとも「自己経験グループ」は「私自身を知る」ことが目的であり、セラピー的要素をもつ。スーパービジョンワークにおける「自己経験」は、職業活動の改善が目的であり、その限りにおいて、自己経験の意識化が必要である場合にのみ実行されるものであり、セラピーとは一線を画している。

すなわち、セラピーにおいては、「クライアントの主観的思考と行為にとって重要な、セラピーとして熟慮される人格関連的な生育暦上の関与と発見のために呼び起こされるものとして」<sup>5)</sup> 自己経験がテーマ化されるのに対して、教育スーパービジョンにおいては、「スーパーバイザーの職業上の専門的な思考と行為にとって重要な人格関連的な生育暦上の関与を熟慮する意味において」<sup>6)</sup> 自己経験がテーマ化されるといえる。付言して言えば、人格上の負荷や問題と関連した抑圧感を予防し、減少させるために自己経験をテーマ化している精神衛生学とも異なっている。

ワークエレメント「自己経験」は、以上の意味において、現在求められている教師の批判的反省能力を開発する上でも重要な位置を占めている。ワークエレメント「自己経験」は、何重もの観点から、教師人格に関連したコンピテンスを拡大するのを支援する。ワークエレメント「自己経験」のなかで考えられているコンピテンスは、次のものである<sup>7)</sup>。

- ①生徒、同僚、上司、保護者などとの専門家としての交際のありようを問い直し、場合によってはこの交際のありようを改善するという目標をもって「自己」をテーマ化できるコンピテンス。すなわち、自己知覚、自己責任、自己コントロール、自己対決を促進するコンピテンスである。
- ②職業上の文脈において意味をもつと思われる生育暦上の辛かったことを認識し、ありありと思い浮かべるコンピテンス。すなわち、職業上の文脈において専門家として知覚し行為するさいの「盲点」を認識するコンピテンスである。
- ③ある現象や行動方式にとっての個人的な影響ファクターを抽出するという目標をもって、自己観察を介して拓かれた「自己経験」を認識し熟慮するコンピテンス。すなわち、教育的自己コンセプトを認識し、熟慮するコンピテンスである。
- ④リアルな自己査定と自己記述を熟慮するコンピテンス。
- ⑤授業での指導ポジションを個人的に充足するコンピテンス。
- ⑥職業生活での経験と関連して学んだことや個人的体験を促進するコンピテンス。

以上の六つのコンピテンスの拡大が、ワークエレメント「自己経験」に含まれる。そして、これらのコンピテンスは、教師に求められている反省的思考ないし批判的反省に含まれるコンピテンスでもある。

自己経験は上述したように、個人の中に特有なかたちでネット化され、個人の行動にいわばその総体として影響している。それゆえ、自己経験をさまざまな領域に細分化する試みは、常にリスクを伴うものであり、その区分は人工的であり不完全であるといえる。このリスクと不完全さを踏まえた上で、研究分析上の理由から、限定された領域をより厳密に、目標づけて観察ことを承認するために、次の三つの領域に分割することが提案されて

いる 8)。

#### ①個人的自己経験としてのプライベートな日常経験

プライベートな自己経験とそこから生み出される主観的な日常理論は、個人が日常的な要求や問題をマスターする助けとなる。

#### ②職業的自己経験としての専門的経験

専門的経験は、職業活動での確実さとルーチン化と冷静さを個人に媒介することを狙っており、その対極にある運動し発展する不確実さとの緊張領域にたいいてい存在している。このフレキシブルな均衡によって、職業活動は停滞し硬直化するのを免れている。専門的な日常理論は、職業活動を秩序づけ、組織化する助けとなる。

#### ③持続して人格に特殊に関与する生育暦上の経験

生育暦上の経験は、プライベートな日常経験と職業的な日常経験の人格固有な融合を表している。以前になされた経験の総体が、人格に特殊に影響する主観的な日常経験をかたちづくる。

教育スーパービジョンにおいて、自己経験を取り上げるのは、自己経験が職業活動における教師の思考と感情と行動に影響しているからである。そして、この影響を認識し理解することが、職業活動の助けとなると考えられているからである。だから、セラピーや自己開発ワークに置けるように、自己経験それ自体を明らかにすることには焦点化されていない。このワークで自己経験が問題になるのは、職業活動の改善のためであって、その目標に規定される限りで問題となる。

### 2) ワーク「実践活動を規定する教師の経験の意識化」の方法

本ワークは、上述したように、スーパーバイザーについて心理分析的診断や深層心理学的診断やセラピー的診断をすることが目的ではなく、職業活動の改善に向けて一定の結論を引き出すために自己経験を現在化することが目的である。本ワークは、①「自己知覚と他者知覚」、②「プライベートな自己像のデッサン」、③「職業上の自己像のデッサン」の三つの方法をもつ。そして、それぞれの方法を使ったスーパービジョン進行のために開発されたワークシートが利用される。

次に、三つの方法の概略と、③「職業上の自己像のデッサン」で使用可能なワークシートの一例を挙げる（資料1、2参照）9)。

#### ①自己知覚と他者知覚

この方法は、自己経験が関与していると認められるが、なお「プライベートな自己像」あるいは「職業上の自己像」に整理されない、全ての自己経験の関与が問題になるときに採用される。つまり、スーパーバイザーには、強い個人的関与が認識されてはいるが、なおプライベートな自己像とも職業上の自己像とも明確に整理し得ない職業上の問題を取り上げるときに使用される方法である。

スーパーバイザーによって話される自己経験の関与は、なお明確にテーマとして整理されていないので、スーパーバイザーは整理のための進行において、非常に柔軟に創造的に対話する必要がある。

資料1 ワークシート「矛盾した教育目標の設定」

教師は、たまに互いに矛盾している教育目標と表象をもつことがある。さらに、目標と表象にさまざまな側面から多種多様な、しばしば対立する要求と期待が持ち出される。このことによって、追求する目標の不明確さと不確実さが生じうる。

このワークカードは、目標設定におけるくい違いが意識化されることに貢献する。まず教師は、与えられたいくつかの例を反省的に検討し、最後に自分のものについて補充する。これに基づいて、教師は、いくつかの目標が同時に追及されない場合に、優先順位をつけて決定できる。

目標設定における矛盾

私は生徒たちを守り、応答と批判をもって促進したいし、感情を害したくない

私は、リアルな自己査定を援助する方向づけとして生徒たちを判定し、評価し、点数をつけたい

私は全ての生徒たちに対して公平であり、彼ら全てに同じ権利を認容したい

私は、個々の生徒と個々の生徒の人格を正当に評価したい

私は生徒たちにつらい経験をさせないために、援助し支援したい

私は、生徒の自己責任と自主性を促進したい

私は、徹底して、明確に、生徒にとって納得できるように、私の要求を定式化し、浸透させたい

私は、一定の状況において個々の生徒をよく理解して、許して、彼の行動とともに受けいれたい

私は、授業と授業単元のための私の内容的な学習目標を達成したい

私は、個々の生徒の個人的な学習テンポを考慮したい

私は、グループや社会における生活のための生徒の適応能力を促進したい

私は、生徒の個人的な貫徹力を促進したい

私は、生徒が私の直接的な指示に従うようにしたい

私は、生徒たちに学習過程を個人的に構成するための余地を与えたい

私は、生徒たちが授業において互いに傾聴することを学習させたい

私は、全ての生徒が学習対象についての連想を自発的に表現することを学習させたい

資料2 ワークシート「人格的な態度の自己評価」

人格的な態度1 自己評価

人格的な態度の自己肯定は、教育学的な自己コンセプトへの可能な一つのアプローチである(AE3 参照)。それは、それが他者査定と比較されるときに(P-12：人格的な態度Ⅱ：他者査定Ⅰ)特に、啓発的である。

教師は、自分の人格的な態度のさまざまなアスペクトを査定することが求められる。

対話における可能な質問は次のものである。：

- ・教師は、クラスの前での自分の人格的な態度を自分でどのように査定しているか？
- ・彼は、自分の査定をどのように根拠づけているか？
- ・指導者による他者査定との相違は、どこに存在するか？(P-12：人格的な態度Ⅱ：他者査定、参照)
- ・自己査定と他者査定との相違は、どのように説明されるか？
- ・自己査定と他者査定を互いに近づけるには、どのような可能性が存在するか？

	クラスの前に立つとき、私は安心している						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は授業の中で、私が考えていることや感じていることを示す						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、生徒や両親や同僚や上司に対して私の見解や意見を弁護する						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、教師としての自分に満足している						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、人間として自分のことを、可能性と限界と共に考えにいれている						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、興味深い、変化にとんだ授業をしている						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は授業の中で、生徒の関心や遂行可能性を考慮している						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、授業における妨害や特別な状況に対して、卓越して適切に反応している						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、生徒とよい関係をもっている						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は全ての男子生徒と女子生徒を同じように扱っている						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ
	私は、生徒遂行を公平に、適切に評価している						
全くそうでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	全くそうだ

## ②プライベートな自己像のデザイン

この方法は、職業活動に自己経験が妨害的に関与していると推量されるときに、そしてそれが非常にプライベートな経験によっていると推量されるときに採用される。

## ③職業上の自己像のデザイン

この方法は、職業活動での自己経験が関与して、職業活動の困難を引き起こしていると推定されるときに採用される。教師は職業活動において、そして活動している間に自己経験し、意識的、無意識的にその経験の成果やその経験の洞察、あるいはその経験の苦しみを再び職業活動に持ち込んでいる。これは全く普通のことである。自己経験が教師の活動動機や改善能力に肯定的に作用している限りは、自己経験はエネルギーの源である。しかし常にそうであるとは限らない。スーパーバイザーの抱える職業上の困難や問題が、過去の経験とつながっていないかどうか問われる。

資料1は、当該の教師が設定している教育目標の食い違いを意識化するのを助けるためのワークシートである。教師が教育についてもつ自己コンセプトには自己経験が関与しており、自分がどのようなコンセプトをもっているかを認識できることは、先に述べたように一つのコンペテンツである。教師の教育についての自己コンセプトは、教育目標にも現れる。そこで、当該教師がどのような教育目標を設定しているか、教育目標間に食い違いはないのか、もしあるとすればなぜ食い違う目標が立てられているのか、これらのことを意識化することを通して自己経験の関与を明らかにする助けとなるワークシートである。

資料2は、対生徒との関係において、教師がどれほど自己肯定的であるかを自己査定するのを助けるワークシートである。この自己査定をとおして教育的自己コンセプトへアプローチすることが可能である。

ここでは、2枚のワークシートを例示したが、一般的にこのようなワークシートを使用したスーパービジョンワークがどのように進行するのか、その概観を次に述べる。

### 3) スーパービジョンワーク「実践活動を規定する教師の経験の意識化」の進行の概観

スーパーバイザーである教師が、何らかの課題をもってスーパービジョンに参加するときに、当該教師の自己経験は、あらゆるところに関与している。例えば、授業観察をする場合にも、自己経験は何らかの形で関与していると考えられる。その意味では、自己経験はあらゆるスーパービジョンワークに関連している。しかし、ここで特に自己経験の意識化として、本ワークを設定するのは、自己経験の意識化が、スーパービジョンワークの進行にとって不可欠であるとスーパーバイザーによって判断され、同時にスーパーバイザーによって同意された場合に限定される。

スーパービジョンワーク「実践活動を規定する教師の自己経験の意識化」は、次の中心課題をもつスーパーバイザーの指導の下で実行される 10)。

#### (1) 自己経験の関与を診断する

スーパービジョンワークを計画し実行する上で、自己経験が関与している位置価値をスーパーバイザーがリアルに査定し、職業活動のコンテクストと関連付けて熟慮する。そして本ワークの成果を考慮することがどれほど必要であるかを判断する。スーパーバイザー

は、自己経験に関して、①個人的な自己経験としてのプライベートな日常経験、②職業的  
自己経験としての専門的な経験、③人格特殊な関与としての生育暦上の経験、を区別して、  
スーパービジョンワークにおける適切な重点を設定する。

#### (2) 自己経験の関与をテーマ化する

スーパーバイザーは、スーパービジョンワークにとって重要なスーパーバイジーの自己  
経験の関与をテーマ化する。一定の現象やスーパーバイジーの行動にとって目立っている  
と認められうる個人的経験や専門的経験を熟慮する可能性を提供する。ここでは、スーパ  
ーバイジーの活動と関連した感情や体験に重要な位置が認められ。

ワークの中心に、次のような問いが設定される。

- ① スーパーバイジーの当惑はどれほど大きいのか。
- ② スーパーバイジーのどのような感情や体験が、話されたテーマと結びついているのか。
- ③ 職業活動において、生育暦が関与していることをどのように意識化しているか。
- ④ 生育暦が関与していることをテーマ化することを望むか。

#### (3) 自己経験の関与を考察する

話されたテーマと内容に刺激されて浮上してきたスーパーバイジーの考えや思い出や連  
想や感情を、スーパービジョンにおける個人的熟慮のために、それらを建設的に転換する  
という目標をもって、スーパーバイジーが体験できるようにする。

スーパーバイザーは、目標付けられた介入と援助を通して、スーパーバイジーの職業活  
動に意識的、無意識的に影響している主観的経験をスーパーバイジーが再構成できるよう  
にする。スーパーバイジーが、スーパービジョンワークのなかで現れてきた自己の考えや  
感情に立ち入り、それらを明瞭にし、自己の思考と感情と行為のために理解深めるという  
目標をもって、それらに立ち向かうことを支援する。

#### (4) 基本仮説の実現

スーパービジョンワークの進行と介入において、スーパーバイザーとスーパーバイジー  
との関係は、次の基本仮説を受け入れることによって規定される。

##### ① 自律と相互依存

外的コントロールに依存しないで、社会生活に入り込んだ緊張領域で他の人間と対話し  
対決する際の自己責任を志向する。

##### ② 自己実現

実際の自分と継続発達と成長を志向する。

##### ③ 目標定位と意味定位

自分で選択した課題を目標志向的に実現することと、意味豊かな行為を目指す。

##### ④ 全体性

情動と認知と動機の全体性を考慮する。生物的、心理的、社会的存在としての全体性  
において行為する主体を熟慮する。

#### (5) 自己経験についての練習

スーパーバイザーは、自己経験の練習を意味豊かに、適切に、スーパーバイジーの職業  
活動との対決に向けられたスーパービジョンワークに統合する。スーパーバイジーが練習  
し、反省し熟慮するのをスーパーバイジーの身になって適切に指導する。



## (6) 人格的コンピテンスの促進

スーパーバイザーは、スーパービジョンワークの間、スーパーバイジーの職業コンピテンスの助けとなる人格的諸能力を促進する。それは次のものである。

- ① 自分と他者について、肯定的な感情と否定的な感情を持つ自己経験
- ② 自己受容とリアルで肯定的な自己評価を促進する
- ③ 成功体験と失敗体験の建設的な熟慮の促進
- ④ 欲求充足の促進
- ⑤ 社会的コンピテンスの促進（インターアクションとコミュニケーションと葛藤熟慮のコンピテンス）
- ⑥ 認知的コンピテンスの促進
- ⑦ ストレス克服コンピテンスの促進
- ⑧ 自己統御と自己調整の促進
- ⑨ 立場変更のための動機付け

## (7) 心理セラピーとの境界づけ

スーパービジョンワークの間に、心理セラピーとの交差が生じる場合があるので、心理セラピーとの境界付けが必要である。スーパービジョンワークにおいて自己経験の関与を問題にするのは、職業活動における専門的思考と行為に意義を持つ限りにおいてであり、そしてスーパービジョンワークを建設的に進行するのに有用である限りにおいてである。だからもし、セラピー的熟慮に入り込むようであれば、スーパービジョン以外でセラピー的熟慮が可能であることを示し、スーパービジョンワークとしてはその限界を保つことが必要である。

## (8) 人格の持込

スーパービジョンワークとして自己経験の関与をテーマ化するさいに、スーパーバイジーの自己経験が持ち込まれるのと同様にスーパーバイザーの自己経験が、すなわちスーパーバイザーの個性や介入やコミュニケーション態度が持ち込まれる。だからスーパーバイザーは常に、スーパービジョン過程において自己経験を意識化し、行動として実現する能力と準備性が求められる。

## (9) 自己反省への準備性

このスーパービジョンワークを進行させるためには、言うまでもなく、スーパーバイザーは、自分の自己経験と対決する準備性をもつことが必要である。スーパービジョンワークにおいて、スーパーバイジーと建設的で効果的な関係を構築するための前提として、スーパーバイザーは自分の人となりと行動を自ら意識的に知覚する。またスーパーバイザーは、自分の思考と感情と行為を一致させる、ないし呼応させるように努力し、自分を受け入れ、自己経験とつきあうためのバリアを取り去る努力をする必要がある。

ここでは、スーパービジョンワーク「実践的活動を規定する教師の経験の意識化」の進行過程を、スーパーバイザーが熟慮すべき視点から概観した。自己経験を他者に話すことは、人格に深く影響している経験であればあるほど難しい。だから、このワークは信頼と相互尊重のあるスーパーバイザーとスーパーバイジーの間で、あるいはスーパービジョングループにおいてのみ可能である。そして、このワークの進行には常に、スーパーバイジ

一の同意が必要であり、またスーパーバイザーはスーパーバイジーの感情の動きに繊細でなければならない。

このような難しさをもつがしかし、教師自身が意識化していなかった経験をありありと思い出し、その経験が現在の思考や感情や行為に少なからぬ影響を与えていることを認識することが、次のステップを切り開く。だから、本ワークを通して獲得された認識や批判的反省の難しさの体験など、全ての成果が、授業と教育活動の改善に向けてテーマ化されている他のワークと適切に、有効に結び付けられる必要がある。

#### 注

- 1)Pallasch,W. : Supervision.3 Aufl.Weinheim und München 1997,SS.178-180.
- 2)Ebenda,S.183.
- 3)Ebenda.
- 4)Pallasch,W.,Köln,D.,Reimer,H.,Rottmann,C.:Das Kieler Supervisionsmodell. Weinheim und München 2001,S.231.
- 5)Ebenda,S.231.
- 6)Ebenda.
- 7)Ebenda.
- 8)Pallasch,W.:A.a.O.,SS.184-197.
- 9)Pallasch,W.,Köln,D.,Reimer,H.,Rottmann,C.:A.a.O.,S.602,622.を参照し、筆者が一部修正したものである。
- 10) Ebenda,SS.235-237.